

## 子どもの遊び・スポーツと家族の暮らし — 子育て支援活動の基本理念の探求 —

須賀 由紀子

### Play, sport, and quality family life — Creating ground concepts for child care support —

Yukiko Suga

#### Abstract

The present study treats the basic concepts of the social support activities for child caring from the viewpoint of the physical development. First, we review the fundamental theories on the relationship between the play and the physical development to bring up children in sound conditions. Then, we examine the meaning and cultural importance of playing for human beings, in order to seek for the nature of sport, focusing on the traditional work of Johan Huizinga's play theory in *Homo Ludens*. After the consideration of the value of playing from the perspective of the human cultural history, we discuss the necessity to build up the quality family life valued on the plenty of play and sport, hoping for children's well-being. So we need to consider seriously the importance of developing social support programs to help create the wellness of the family life filled with the spirit of playing. As a result, we come to the following conclusion: 1) the importance of social support programs to provide opportunities to feel the sense of physical competence for each child, 2) the necessity to give opportunities to the parents to know the basic theories of the importance for the playful life and the meaning of sport for children, 3) the need to provide cultural sport events to get to know the value of sport as play. Through these social support activities, the parents will come to know the importance and meaning of playing for their own quality life as well as good for the child caring.

#### 1. はじめに

「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の時代へ、と言われて久しい。戦後高度経済成長を経て、物的な豊かさを享受できるようになった日本人が、「このまま物の豊かさを追い求め続けても、本当の幸せとは違うのではないか」と気づき始めて四半世紀がたつ<sup>註1)</sup>。バブル崩壊以降、厳しい経済低迷の時代となったが、しかし、生活の基調は「心の豊かさ」への問いかけであり続けている<sup>1)</sup>。

そのような時代の空気の中、社会貢献活動に取り組む企業も多い<sup>註2)</sup>。企業の社会的責任（CSR）として、営利を超えた社会活動を行い、市民社会の幸福に寄与したいと考えている。そこでは、企業特性を活かした取り組みに知恵を絞り、文化・芸術・スポーツ・教育・福祉・科学技術等の分野でスポンサー的役割を果たすことが多い<sup>註3)</sup>が、その中で「次世代の子どもに向けて」というフレーズを、数多く目にするように思われる。

また、近年活動が活発化している NPO 法人<sup>註4)</sup>においても、子どものための活動を目的とする法人は多く<sup>註5)</sup>、野外活動やスポーツ教室の開催、親子の遊びの機会の提供、食育、読書活動など、様々な活動が展開されている。

さらに行政でも、地域ぐるみの子どもの教育が大事と考え、特に土曜日などを活用して地域の人的資源を活かした子どものための事業を多数企画し、参加の機会を開いている<sup>註6)</sup>。

子どもの研究もさかんになっている。門脇は、「ここ数年、子どものための調査・研究活動」への関心の高まりがみられるが、その背景として、「最近、子どもの発達に異変が起こっている」という意識があるのではないかと指摘している<sup>註7)</sup>。

戦後、自然のリズムに即した暮らし方から人工的な都市型の暮らし方へと移り変わり、生活はどんどん便利になった。その反面、生きる上での基礎となる身体能力が貧弱になり、それに呼応して、情緒面、社会性などの面でも不安を感じる子どもの育ちへの危惧が、子どものための事業をさかんに行っているのではないだろうか。今、社会全体が協力して、次世代をになう子どもたちに、何かよりよき活動をしていきたいという思いに充ちること、それ自体はとても望ましいことであろう。

そうであるならば、子どものための社会活動も、幼児・児童教育の一環として、高い理念を持ち、方法論を積み上げていかなければならないのではないか。一時の流行で他に追随したり、主催者の思いつきの企画で人とお金を使っていることはないか。誰にでもわかる説明しやすい企画書で予算をつけ、中身の質を問うことなく、「何人来たか」で結果のよしあしが評価されるようなことに陥っていないか。

私たちは、一体子どもたちにどういう大人になってほしいと考えているのだろうか。そのためには、親と子のどのような暮らしが望まれるのだろうか。子育て支援のあり方として、今本当に必要なことは何だろうか。そのような問題意識をもとに高い理念を持つことなくして、「子どものため」を目的に掲げるイベントや事業を手がけることはできないのではないか。そして、理論を背景においた地道な社会活動の積み重ねこそ、時代の基調である「心豊かな暮らし」への確かな橋渡しとなるの

ではないか。

このような問いかけを起点として、本稿では、健やかな身体を育むという観点から、子どもの遊び・スポーツの本質を問い、その受け皿となる家族の暮らし、そして、子どもの遊び・スポーツを豊かにする社会的支援活動のあり方について論考をすすめる。

そのための方法として、まず、健全な身体づくりに深く関わると考えられる子どもの運動発達の理論と遊び・スポーツの関係、及び、遊び・スポーツが人間にとって持つ本質的価値について、ヨハン・ホイジンガのプレイ理論をもとに検討する。その上で、子どもの遊び・スポーツを豊かにする受け皿となる親と子の暮らしに大切な視点を考察する。以上を踏まえ、最後に、心身健康な子どもを願う子育て支援活動のあり方について基本におくべき視点を述べていきたい。

## 2. 子どもの運動発達と遊び

なぜ、子どもの「身体」に焦点をあてるべきか。

第一に、人間は高度な精神活動を全うすることが生涯の営みではあるが、その精神活動の源には「身体」が必要だからである。我々は身体を通し感受したことをもとに、知的、社会的な営みをする精神的存在である<sup>註8)</sup>。従って、よりよい精神活動の完成のために、まずは、身体づくりが第一に大切である<sup>2)</sup>。

第二に、幼児期に獲得する基本動作、基本的運動は、生涯にわたっての人間の暮らしに必要な動き<sup>註9)</sup>の基礎になるからである<sup>3)</sup>。この時期の十分な身体活動は、生涯の生活の質を左右する重要な事柄である。

第三に、外遊びの減少<sup>註10)</sup>、テレビやゲームなどで非活動的に過ごす子どもの時間の増加<sup>註11)</sup>、交通手段の発達、自動化・都市化した生活環境などを背景に、日常の暮らしの中での子どもの身体活動量が減少し、発育発達期にある子どもの体力・運動能力の獲得に影響を与えていることが指摘されるからである<sup>4)</sup>。

さて、子どもの身体づくりを考えるためには、子どもの運動の発達と遊び・スポーツの関係について、正しく理解する必要がある<sup>註12)</sup>。これにつ

いては、幼少年期の運動能力の発達理論に学ぶことができる（図1）<sup>5)</sup>。それは、次のような段階を踏む。

①乳幼児期の初歩的運動能力段階

人間は他の動物にくらべて、生理的早産の状態で見られるため、自分なりの活動ができるようになるまでに相当な時間がかかる。生後すぐは反射的行動だけであり、親との関わりを通して、人間の暮らしに必要な動きを習得していく。この時期は、直立姿勢（座る、立つなど）、移動（這う、歩く、昇降など）、把握と操作（つかむ、放す、放り投げるなど）の最も初歩的な運動を獲得することが発達課題となる。これらの運動能力の習得は子どもの行動を拡大し、探索や発見による学習機会を増大し、次の発達段階への移行を促す。身近な保育者は、子どもの自発的な動きを促す関わりが大切である。

②幼児期の基本的運動能力段階

生涯にわたって必要となる基本の動きを幅広く獲得する時期で、移動系（走る、跳ぶ、ホップ、スキップなど）、非移動系（押す、引く、曲げる、伸ばす、回るなど）、操作系（投げる、捕る、打つ、蹴るなど）の運動が、並列的に、しかもある順序をもって習得される。多様な運動形態を習得する（運動の量的発達）とともに、それぞれの運動の仕方にも年齢相応に習熟する（運動の質的発達）。この時期の運動能力の発達に重要なことは、たくさんの自由な運動遊びである。

③児童前期の移行的運動技能段階

前段階の幼児期の動きがさらに上達すると同時に、複合的な組み合わせの動きもできるようになり、ルールのある簡単なスポーツ遊びを楽しめるようになる。スポーツ技術を体系的に習得させるには早すぎる時期で、自由な遊びで身体を動かすことが大事であり、様々な運動を遊びとして楽しみながら、一つ一つの動きの質を高めていく時期である。

④児童後期の初歩的スポーツ技能段階

この段階は、いろいろなスポーツを一番効率よく身につけることのできるゴールデン・エイジとされる。これ以前の段階をしっかりと踏んでいると、新しい運動にすばやく共感し、運動の全体を捉えてそれを真似ていくことができる。しかし、前段階までの運動習得が不十分だと、それは難しい。この時期はスポーツを専門種目化するには時期尚早であり、多種目のスポーツを遊びとしていると楽しめる環境が望ましい。

以上の発達段階の中で、幼児期における自由な遊びでの運動経験の質と量が、動きの発達には特に重要である。この時期に十分な運動遊びを踏まらず、それが児童前期の小学校低学年にも改善されずにすすむと、基本的な動きの発達が阻害され、その後のスポーツや様々な運動技能の習得がむずかしくなるといふ<sup>6)</sup>。生涯の身体づくりに影響する最も大事な時期は、幼児期から児童前期にかけての自由な遊びの時期なのである。

さらに大事なことに、それは、単に身体づくりに影響するだけではない。身体運動の発達は、子

年齢区分	発達段階	獲得される運動能力	発達過程における特徴
誕生～2歳 乳 児 期	初歩的運動能力	直立姿勢，独立歩行， 把握・操作， 環境の探索・発見の能力	未熟さからの出発 反射から随意運動へ 人間らしさへの第1歩
3歳～6歳 幼 児 期	基本的運動能力	多様な基本的運動形態 移動型，平衡型，操作型 の運動能力	運動能力の基礎づくり  運動組合せ 能力の発達 その始まり
6歳～8歳 児 童 前 期	移 行 的 運 動 技 能	基本的運動の習熟 スポーツ運動につながる 運動遊び，ゲームの能力	Closed system 変量の少ない一定条件下 での運動能力に限られる
9歳～13歳 児 童 後 期	初歩的スポーツ技能	移行的運動技能の習熟 初歩的スポーツ技能を 習得する能力	習熟のための障壁  運動組合せ 能力の向上 かなりの習熟レベル
			Open system 多くの変数が絶えず 変化する条件下での 運動能力の獲得

図1 子どもの運動能力の発達とそれぞれの段階における特徴<sup>5)</sup>

どもの探索活動を広げ、好奇心を広げる上で大切なことである。たとえば、歩くという運動が形成されなければ、子どもが心身刺激を受ける行動範囲は狭いままである。従って、それぞれの発達段階に必要な運動能力形成ができないと、その段階における心身全般にわたる発達バランスを崩す。幼少年期の運動能力の発達は他の発達領域と密接に関連し、子どもの情緒や社会性・パーソナリティの形成に多大な影響を与えるのである<sup>7)</sup>。

特に幼児期は、運動発達の程度がその子どもの成長を示す面が大きい<sup>8)</sup>。「仲間と同じ水準の動きができる」ということが、情緒的にも安定し、積極的に新しいものへ向かう気持ちや行動を生み、一人遊びにもじっくり自信を持って取り組めるようになり、友達との関わりも豊かになり、社会性の発達や自己概念の強化など子どもの発達に大きく貢献する。反対に、動きの発達が遅れると、劣等感を抱いたり、依存心が強まったり、心の障害につながる可能性をもたらす。それぞれの段階にバランスのとれた運動能力を発達させることが、子どもの全人的な発達全般に不可欠なのである<sup>5)</sup>。

以上のことから、生涯の暮らしに大きく影響する基本的な運動習得という面からみて、幼児期および児童前期にかけての十分な自由な遊びがいかに大切であるかがわかる。特に幼児の運動能力の獲得は、「おとなから子どもへ」型の運動指導ではなく、暮らしの自由な遊びの中で、子どもが自分で身につけていくべきもので、組織的な運動学習は自由な動きの創造をかえって阻害する<sup>9)</sup>。自由に遊ぶ時間と空間をいかに生活の中で習慣化しているかが重要である。

### 3. スポーツの本質的価値の検討

#### (1) 遊びとしてのスポーツ

基本的運動習得の段階を経て、多種目のスポーツへと広がる児童後期以降の段階は、様々なスポーツとの楽しい関わりを経験を重ねていきたい。そこで考えたいのは、遊びとしてのスポーツの魅力に子どもを誘うという視点である。

日本の体育教育では、その教材内容であるスポーツが、身体を鍛える手段あるいは人間形成の手段とされてきた伝統があり、技術中心主義の体育

指導では「できる・できない」の結果が重視され、体育嫌い、運動嫌いを生んできた面がある<sup>10)</sup>。しかし、本来子どもはよく動き回るものであり、先に述べた運動発達段階からみても、遊びの中での活発な身体運動から、ルールがあつて組み合わせの動きを要求されるスポーツ活動が次第に楽しめるようになってくるのであるから、子どものスポーツは「遊び」の延長として捉えることが大切であろう。本来「遊び」であるスポーツが子どもの「遊び」の領域を離れて、「遊び」でなくなるとき、子どものスポーツはその本来の楽しさを失ってしまうと考えられるのである<sup>11)</sup>。

従って、子どもが主体的にスポーツと関わり、それを生涯の活動へとつなげていくには、スポーツを一つの「遊び」の形式として捉え、その人間的な価値を問うという思考作業が大切であろう。では、スポーツの遊びとしての価値とは一体何か。ここでは、ヨハン・ホイジンガの古典的プレイ理論から考えることが有益であろう<sup>14)</sup>。

遊びの理論には、人間が「遊ぶこと」についての3大研究として、ヨハン・ホイジンガ<sup>11)</sup>、ロジェ・カイヨワ<sup>12)</sup>、ジャック・アンリオ<sup>13)</sup>の思索がある。この中で、カイヨワは、数多くの遊びの種類を分析したが、人間が遊びを遊ぶことのそのものの価値については描き出していない。アンリオは、「遊び」そのものではなく「遊ぶこと」を実存哲学の立場から現象学的に捉えたが、それはホイジンガのように全文化史を覆うような視点ではなく、人々の暮らし方全体に影響を及ぼすものではない<sup>14)</sup>。その中で、ヨハン・ホイジンガは、「遊ぶこと」を動物的生の原点に見だしながら、それが人間にとって本質的生き方に関わる営みの根幹をなすものであり、そして遊びの様式そのものが人間の文化の歴史を形作ってきたことを、豊富な知識と資料をもとに力強く論じている。ホイジンガ自身、それまで行われてきた心理学的、生理学的見地からの遊び研究を、「どの見解も解釈も正しい」としながらも、「どれもが正しいということは、どれ一つとして遊びを包括的に捉えた研究ではないことだ」と述べる<sup>15)</sup>。そして、どの研究も、遊びは「何かのために行われる」というその目的価値を探求していて、遊びそのもの、それ自体の本質は一体何なのかを描くことには成

功していないとする。一体、遊びの本質は何か、遊びはどういうあり方をしているのか、それは人間にとってどういう意味があるのかという本質への問いこそ、自分の研究の中心であると述べている。従って、我々は、このホイジンガの理論を学ぶことの中に、「遊びを遊ぶこと」の原点からみたスポーツの本質的価値の探求の道筋を見いだすことができると思われるのである。

それでは、ホイジンガの考え方に沿いながら、人間にとってのスポーツの本質的価値について、「人間と遊び」の観点から見つめ直してみたい。

人間は、地球上の生物の中で、二足歩行の生活様式を確立したために脳が発達し、最も高度な精神的営みを展開している生き物と位置づけられる。その人間も、肉体を離れては存在しない。身体を通して、その精神活動を完成させていく生き物、それが人間である。従って、犬や猫の子どもがじゃれて遊ぶのと同じように、遊ぶことが生活の全体であるという存在様式が、人間にとっても原初の形態として自然である。このように、遊びの様式が、いわゆる動物界と人間界の両方にまたがるということは、遊びそのものは、理性に基づくものではないといえる。

その人間の遊びが、やがて動物の遊びと質の違うものになる岐点は、人間は「自分はいま、ここで実は遊びを遊んでいる」ことを自覚するようになるという点にある。すなわち、人間は遊びを遊ぶための「ルール」を作って、それをわかりあって遊ぶようになる。ここに、人間の遊びの独自性が発生するのである。

ルールは、幼児期の子どもの遊びにも存在する。鬼ごっこやかくれんぼにも、遊びを成り立たせるルールがある。ルールを知り、ルールを守りあうことができ始めて、遊びが楽しく成立する。

ルールを感じながら遊ぶということは、これは「遊びである」と知っているということである。そして、「ルールのある遊び」を遊べるようになると、子ども自身の中でも、ルールを知っていると、遊びが楽しく遊べる、ルールを守らなければ仲間とも楽しく遊べないと理解されるようになり、そこに社会性や情緒性も育まれてくることになるのである。

かくて、人間の遊びに固有の特徴が観察される

ようになる。これをホイジンガは、次のように整理している。

①遊びは、全くの自由な活動である。強制されてやるような遊び、それはすでに遊びではない。子どもや動物が遊ぶのは、そこに楽しさがあるからで、その点にこそ彼らの自由はある。そして、真面目な人生の中に立つ大人にとっては、まさに選択の自由の中から選び取ったものが遊びであり、そこで自由な空想や行動を楽しむものである。

②遊びは、虚構の世界である。本物の生、すなわち真面目な生活とは別のところにあるものと誰もが知りながら遊んでいる。子どもでさえも、これは遊びだ、と知りながら、ごっこ遊びをしている。ところで、ここで大切なことが一つある。確かに、「本来の生」ではない、「日常の通常のものではない」という自覚がありながら、そこで遊ぶこと、真剣に遊ぶことの価値に誘われて、繰り返していくうちに、やがて遊ぶということが、一つの生活のリズムとなり、生活を形作る中心価値となるという点である。個人の生活の中においては、その人の遊びの精神が生活全体に活かされるようになる。社会全体も遊び精神に彩られる時に、遊び心のある文化に充ちた社会となるのである。

③遊びは、その遊びのために区切られた時間・空間の中に於いて遊ばれる。従って、遊びには始まりがあって、終わりがある。そのことを、誰もが認識して、その中で遊んでいる。時間と空間の限定性の中で、遊びをより楽しく成り立たせるために、その中の遊びを統べる秩序がある。この秩序が、遊びに固有の緊張感を生み出すことになる。

④従って、全ての遊びに規則（ルール）がある。このルールの中で、美しく遊びを遊ぶところに、人間の文化形式は生み出されていくのである。ルールを知らなければ楽しく遊べない。ルールを理解しない者は、規則破りであり、文化の破滅を導く。

以上が、ホイジンガの捉えた人間の遊びの世界である。

さて、こうした遊びの時空間の中で、人はどういうあり方をしているか。それが問題である。「遊びとは何か」を考えるにあたっては、そのこ

とが最も問われなければならない。

ホイジンガによれば、それは、「緊張・歓び・面白さ」の気分を満たされているということに尽きる。「情熱や冒険の要素、成り行きの不確かさ、そして緊張」が遊ぶ心の本質をなしている。つまり、人を夢中にさせる力、面白さの要素こそ、何と言っても遊びの本質なのである<sup>16)</sup>。

心からその遊びに向かい熱中している時には、「これは遊びなのだ」という自覚の意識はずっと奥の方に後退する。そして、遊びと分かちがたく結びついている歓びは緊張にかわり、ある種の昂揚感をもたらされる。これが遊んでいる人間の心の本質である。しかし大事なことは、遊びに熱中する一方で、「これは遊びなのだ」という意識も持ち続けているという点である。遊びの中に埋没しつつ、どこかで遊びを遊んでいる自分を認識するもう一人の自分がある。そうして「日常性」から離れた遊びの時空間の中で、「日常性の中にある真面目」から身を引き離し、時間と空間の限定性の遊びの中に自分の身も心も熱中して「神聖なる真面目さ」の中で遊ぶ人は、そこで心身の全体性を取り戻すことができる。この遊びの中の「面白さ」「熱中」を最高度に高めるためにあるのが「ルール」であり、「遊びを統べる秩序」といってもよい。

人間にとっての「遊び」は、その人の持てる知力・精神力・体力を活かして、最も真面目に、その人間らしさを享受できる時空間なのである。

潜在的に持っている知力・身体能力の様々な可能性を顕在化させ、心身を解放し、遊びを真剣に遊ぶ。その遊びの中にある人は、熱中、陶醉、名誉、威信の気分を満たされている。これを、ホイジンガは「世界全体を統べているリズムとハーモニーとの一体感」<sup>17)</sup>というふうに表示しているが、スポーツをプレイする、遊びとして遊ぶということの本質は、まさにその気分を支えられているところにある。

このような人間の遊びの本質からみると、それぞれの子どもが自分なりに工夫して挑戦し熱中できる「遊びとしてのスポーツ」の楽しい体験の積み重ねが子どものスポーツの原点に望まれることが、確かに浮かび上がる。

(2) 遊び理論からみた「文化としてのスポーツ」

さて、ホイジンガは、この遊びの形式の中に人間の本質的な欲求が絡んでいくところに、遊びと文化の関係を見ている。その本質的な欲求とは、「より美しくありたい」という美への欲求と「他者よりもぬきんでたい」という名誉、威信、優越を求める闘争欲求である。それは「競争の中で美しく闘う」というふうに両者が一体となることもある。いずれにしても、「つねにより高いものを追い求めたい」という人間の根源的な欲求が、遊びの形式の中で「真剣に」表現され、その中の緊張と熱中、秩序と至高の歓びに浸るとき、人間は心を投入して“遊ぶ”のである。「すべての神秘的、呪術的なもの、英雄的なもの、芸術的なもの、論理的なもの、造形的なものは、気高い遊びのなかに形式と表現を探り求め」<sup>18)</sup>、その中から、詩、文芸、音楽、舞踊、造形芸術、スポーツ、哲学的対話等の文化諸形式が生み出される。そして、プラトンが「人間は最も美しい遊びを遊ぶことがその本性なのです」<sup>19)</sup>と語ったことを引き、ホイジンガは、そのようなあり方こそ最も人間らしい営みであり、まさにその中から、人間の暮らしを彩る芸術文化・生活文化の歴史は創られてきたのだという。「文化は遊びに接ぎ木されたのではなく、遊びの中から文化は生まれた」<sup>20)</sup>とホイジンガが主張するのはこの点である。

たしかに、日々の暮らしの基盤である衣食住の生活文化においても「美しくありたい」「より高いものをめざしたい」という気持ちから美しい生活のありようが生まれてくる。レジャーの領域に目を移せば、たとえば音楽も詩も造形芸術もスポーツも、人間がその精神の高みを求める思いがそれぞれの至高の表現世界を造りだしていく。全ての文化は「遊びの相の下で眺められる」のである<sup>21)</sup>。

ところで、ここで大切なことに気づく。美や卓越性を求める人間の気持ちの受け皿となる遊びの中から文化が生み出されるのであれば、我々は、そうした「遊びを真剣に遊ぶ」という能力を身につけることによって、過去にその「遊び」の中に生きた人々の、あるいは同時代に生きて「遊び」の形式の中で最高の身体美・精神美の表現を追求する人々の深い心を知り、自らの心も磨き、身も心も高貴なるものに近づけていく生き方ができる

のだという点である。

このことを、「お香」という日本独特の遊びの形式の中であてはめて考えてみよう<sup>22)</sup>。お香の文化とは、日本で独自に発達した文化様式であるが、自然の作用で生まれた天然香木から木片をとり、それを焚きしめて、その香りを楽しむ。一つひとつの香りに古来人の名や、古代・中古の人々が自然に気持ちを寄せて歌った歌の言葉から名前を付けて、その香りを愛でる。古代人の気持ちに心を寄せながら、香りの世界に遊ぶ。嗅覚という一つの感覚機能を、遊びの形式の中で研ぎ澄まし、感じたことを言葉に表現することで、心を磨く。この遊びのルールを知った、この遊びを遊べる者同士が享受できる時空間の中で、緊張感に充ちた競技を遊びとして楽しむ。そしてそれは、遊びの形式をとった競技であるがゆえに、「真剣に遊びを遊ぶ」ことになる。その結果、自然界の一つとして同じもののない香木の香りに五官を通して身を沿わせて、この宇宙の中に存在する人間の小ささを思い、人知を超える大きな自然と巡り会えたことの喜びに身を浸すということになるのである。

また、日本には古来から歌の形式(=遊びのルール)をとった言葉の深淵なる遊びの世界もある。歌の言葉を介して、自然界を写し取る。その自然界の中に奥深い精神を読み取り、そこに心をゆだねていく。古の先人の歌の心に自らを重ね、自らの言葉を紡ぎ出していく。心を集中させる和歌の交わしあい、魂の力を競い働かせあう「言葉によるスポーツ」でもあるという<sup>23)</sup>。

このような遊びの姿からスポーツを眺めてみると、スポーツの文化的な価値が大きく浮かび上がってくる。スポーツは、人間が「遊びの形式」の中から紡ぎ出した諸文化活動の中でも、その身体能力を競いあう中から、美しくあること、美しく闘うことを通じて、人間性を表現する最高の遊びの形態の一つなのである。ホイジンガも、スポーツを「肢体の力と気力の芸術」と称している<sup>24)</sup>。

世界で活躍する一流選手の磨き上げた身体や身のこなしは美しい。そして、一流のスポーツ選手の美しいプレイには、より高いものを、より本物を求める人間の精神美を見出すことができる。我々凡人は、そこに心ゆだねることで、高貴な精神・高貴な肉体のあり方を疑似体験したり、そこ

に少しでも近づきたいという憧れの心を抱くことができるのである。

こうして、ホイジンガの捉えた「遊び」の概念を根底におき、人間の根源的欲求との関わりが作り出す文化としてスポーツの価値を眺めれば、「スポーツ=あるスポーツ種目を行う」ということだけにとらわれる必要はなく、スポーツの魅力への多彩な関わり方が導かれてくる。たとえば、スポーツという遊びの形式の中に見られる人間の美を求める精神、名誉、威信、優越を求める精神を、他の文化諸領域——詩や和歌、文学、音楽、造形芸術等——における第一級の作品に表出された心と対比させて見つめる目を育む。そこには、「遊び」を真剣に遊びながら、至高の表現を求めていく人間の本質的在りようが拡がるのである。

#### 4. 遊びの復権と親子の生活文化の創造

##### (1) 現代の暮らしからみた遊びの必要性

20世紀を総括して、「戦争の世紀」という人がいる。その戦争もコンピューターで、人間が機械に合わせて戦う時代である。社会から、人間的な遊びの余裕が消えてしまった時代なのだ。機能的に、便利に、と追い求めてきた結果、生活の中の美しさも消えている。

「西欧文化の基本的考え方にゆとりと遊びが支配し、真面目をその中に包摂していた時、人間的文化は栄え、逆に現代の理詰めの科学、及びそれによる強力な化学兵器が人間を肉体的にも精神的にも支配するとき、余裕の遊びははじき出され、余白の自由は無くなり、ナチス体制や軍国思想が真面目な思考尊重の名目の下に遊び無き社会を二十世紀に造りだした。真面目が余りにも真面目すぎて、遊びを追放した誤りを我々二十世紀の人間は痛切な思いで回顧する」<sup>25)</sup>

人間としての理想の生活を実現していく遊びの時間・空間を閉め出し、経済至上主義、効率性・生産性の論理で自らの社会を作り上げ、その価値観やライフスタイルの中であんじがらめとなつて、心が悲鳴をあげている現代人の哀しさ。そこに風穴をあけるのは、あらためて「真剣に遊びを遊ぶ」楽しみを大切にする生活像ではないだろうか。

ホイジンガは「子どものうちは楽しみのために

遊び、真面目な人生にたつと、休息とレクリエーションのために遊ぶ。しかし人間はもっと高いところ、すなわち美と神聖の遊びを遊ぶことができるのだ」と語る<sup>26)</sup>。そして、プラトンの言説を引き、「人間は神の遊びの具となるべくして造られた。神の具として、最も美しい遊びを遊ぶことこそ人間の姿である」と語る。我々自身の暮らしの中でも、この「美と神聖の遊び」の中に心通わす時空間を持つことで、人間の文化の本質に根ざした大きなものの見方、ゆとりを得て、日々の生活の営みへと帰ることができる。日頃の「真面目」な生活で部分化・細分化した心身を全体に戻し、人間らしい豊かな生き方を営むことができるのである。

このように人間と遊びの本質を眺めてみると、人間としての暮らしの基礎を創るという意味でも、「子どものうちは楽しみのために遊ぶ」という時空間をどれだけ楽しめるかがとても大切である。そして、それを後年の「美と神聖の遊びの価値」へとつなげていくことができるかが、暮らしの充実さにさらに大切である。大人にとっても子どもにとっても、遊びの時空間が縮小する現代社会において、遊びの価値を中心においた暮らしづくりは、急務の課題なのである。

そこで、次に、遊びやスポーツを豊かにする親と子の暮らしに大切な視点について、考察をすすめていきたい。

## (2) 親の養育姿勢と子どもの遊び

幼児期は、自由な遊びのある暮らしを大切にすることが必要不可欠である。幼児期は、身体の発達のみからみても、そして、身体の発達と心・社会性の発達との関わりからみても、様々な外遊びをたっぷり遊ぶ経験を積むことが欠かせない。それぞれの時期の発達課題に応じた十分な遊び、特に運動遊びが大切である<sup>28)</sup>。従って、特に幼児期においては、「自由な遊びを心から遊ぶこと」「熱中すること」が求められるが、そうした暮らしの創造には、親の子どもへの関わり方が影響する<sup>29)</sup>。

森は、子どもの遊び能力の形成要因として、①子ども本人の属性要因、②保護者の属性要因、③子どもを取り巻く物的・人的な客観的環境要因、

④人間関係的要因の4つのファクターを設定し、子どもの遊び能力は、どのような要因によって規定されながら発達するのかを検証している<sup>30)</sup>。そして、子どもの遊び能力へ影響を及ぼす要因のうち、可変的要素が強く子どもへの影響力の大きい要因として、親の養育態度、すなわち、子どもの親への関わり方を挙げている。とくに、子どもの遊ぼうとする意欲を、親がいかにかに受容し支持するかによって、子どもの遊び能力の発達が大きく左右されるという調査結果を示している。そして、遊びを育てる親の養育パターンとして、「受容し、共感し、援助し、見守る」姿勢を指摘し<sup>31)</sup>、何かを教え込もうとする教育意識が強すぎたり、きちんとしたしつけにこだわりすぎることが、知らず知らずのうちに子どもの遊びを抑制したりゆがめたりしやすいと結論づけている。

では、「受容し、共感し、援助し、見守る」という親の養育姿勢は、いかにして育むことができるだろうか。ここではその基本的な考え方として、「子どもの遊びとからだ・こころ研究会」<sup>註15)</sup>が5年間にわたり行ったシンポジウムの討議成果の中から、以下3つの点を指摘したい。

第一に、子ども自身の遊び文化の創出を可能にする環境を見守る姿勢である<sup>32)</sup>。子どもは、ブランコやすべり台や砂場のそろった整えられた児童公園よりも、むしろ、道なき道のような茂みに入ってかくれんぼをしたり、探検をしたり、自分だけの秘密の道を作ったり、ごっこ遊びをしたりする方が楽しい<sup>33)</sup>。その中で、子どもなりのルールを発掘し、そのルールを理解しあう者同士の遊び仲間が生まれる。そのような子どもの遊び環境をいかに保証するかが大切である。

第二に、子どもの主体的な生活を保証することである<sup>34)</sup>。主体的な生活とは、子どもの本質というものを溢れさせていきながら、子どもが身体を通して実感し、深く心から納得するような体験を重ねる生活である。ここで「子どもの本質」とは、「今を最大限に生きている」ということであり<sup>註16)</sup>、子どもが「今を生きる」、その中心にあるのが「遊び」の生活である。この「子どもの本質」の満ちあふれとしての遊びの時空間を保障するために必要なのは、「子どもの時間」を親が深く理解し、共感するという態度であろう。子どもにとつ

では、「時刻」も「時間」もなく、いつも「ちょっとだけ」遊んでいるだけなのである<sup>35)</sup>。でも、その中にたくさんの「今を生きる」子どもの時間が流れている。親にできることは、そこに愛のまなざしを向けること、そして、子どもの主体的な生活を可能にする暮らし方をできるだけ用意するということであろう。

第三に、親自身が「発達とは何か」を理解することが大切である。佐伯は、階段を上るように、教科書どおり発達課題のステップを達成していくことが発達ではなく、「なろうとする過程」「自己拡大活動」そのものが発達であるという<sup>36)</sup>。発達の概念をこのように捉えれば、与えられた環境の中で最大限に生きようとし、そのプロセスの中で、自分を広げていく姿勢こそ大事であり、その基盤を作るのは自由な自発的な「遊び」であるということになる。たくさんの遊びの体験が、発達を支える土台となるのである。

以上のような子どもに対する基本的な見方が、「受容し、共感し、援助し、見守る」親の養育姿勢を形作り、子どもの自由遊びを育てる家庭環境には不可欠であろう。

### (3) 子どもの運動遊び・スポーツへの親の理解と姿勢

次に、子どもの「運動遊び」「スポーツ」に直接関わる親の姿勢について検討してみよう。

金子は、子どもと関わる保護者自身が、「幼児の行動はすべて動きの創造である」という目で子どもの遊びを見守る気持ち、子どもの豊かな動きを創出するファンタジー豊かな暮らしとともに楽しむ気持ちなどが、子どもの遊びには大切であることを指摘している<sup>37)</sup>。また、松田は、子どもの「知的好奇心」に対応する「運動好奇心」への喚起を促している<sup>38)</sup>。ここで「運動好奇心」とは、いろいろと動いてみたいという気持ち、運動遊びのエネルギー（原動力）をさす。たとえば、園への送り迎えは、車やスクールバスではなく、歩く。それだけで、子どもの「運動好奇心」は刺激される。狭いところをうまく通り抜けようとか、登らなくてもよい塀をよじのぼって歩いたり、わざとジグザグに歩いたり、水たまりのあるところを選んで飛び越えていたり、「ただ歩く」というそ

のこと自身が、子どもには遊びとなり、「運動好奇心」を育て、動感を広げる原動力となる<sup>39)</sup>。この「運動好奇心」こそ、子どもが成長に大切な「自己試し」の活動を広げ、自分をたえず広げていこうとする力の基礎となるのである<sup>40)</sup>。運動遊びは成長することそのものであると言ってもよい。このことを、親が理解することは、とても大切なことではないだろうか。

一方、早期教育の観点から、子どもをスポーツ教室に通わせたり、スポーツ少年団に加入させたりする親も多いが、子どものスポーツへの関わらせ方についても親の養育態度への喚起が必要であろう。先に述べたように、早期にスポーツを専門化する必要はない。子どものスポーツはそもそも遊びなのであり、「遊びとしてのスポーツ」に楽しく接しながら、子どもが「身体的有能感」を感じ、自分なりに課題に挑戦していくような気持ちを育てることが何よりも大切である。子どものスポーツは遊びであり、「遊ぶ心」の本質が持っている「楽しい」「熱中」「没頭」「もっとやりたい」「もっと上手になりたい」「認められたい」といった気持ちが満たされることが大事なのである。ところが、親は子どものスポーツに「礼儀」「責任感」「協調性」などの教育的価値や勝利至上主義などをもちこみがちである<sup>41)</sup>。ホイジンガが、「スポーツの組織化と訓練が絶えまなく強化されてゆくとともに、純粋な遊びの内容がそこから失われていく」<sup>42)</sup>と指摘している、まさにそのことが、「純粋な遊び」の様式を備えている子どものスポーツにも生じているのである。そういう大人の価値観の中で、上手下手の優越感や劣等意識、差別意識が生じたりして、子どものスポーツをゆがめてしまう。子どものスポーツは純粋な遊びとしての価値があるということを、親がしっかりと理解して、子どものスポーツを見守る姿勢が大切である<sup>43)</sup>。

### (4) 親自身の遊びの姿勢

以上のような、子どもに直接的に関わる親の養育態度への指摘点に加えて、親自身が自己のよりよい生き方の中で「遊び」の価値を深く理解し、「美と神聖の遊びを楽しむ」という気持ちを持つことが大切であろう。

大人になり、生活の糧を得る仕事や日々の家庭生活に忙しくなってしまうと、どうしても、日々生きることの必要に追われて埋没し、疲れた身体を休めたり、気晴らしをする休養だけの生活になってしまう。「真面目」はいつも日常性の中にあり、その日常性の「真面目」の中であつたが、その日常性の「真面目」の中であつたが、そこから心身解放する休日の中で一息ついて、日常の「真面目」から距離をおき、次の「真面目」の労働の日に向かうためのエネルギーを養う。これが、忙しく働く現代人の一般的な意識であろう。そうすると、「遊び」は、やはり、「真面目」と「真面目」の間にある息抜きであり、「真面目」な生活を促進するための補助的な役割のものへとおとしめられてしまう。「遊び」は「真面目な人生」からみると、その価値を前面に出しにくい。

しかし、先にホイジンガのプレイ理論に基づいて概観したように、人間の存在の原初から「遊び」はある。そして、「遊びの形式」の中で「つねにより高いもの」を求めて、「美しくありたい」「他よりぬきんでたい」という気持ちを充足し、「美と神聖な遊びを真面目に遊ぶ」ことこそ、人間が人間として完成していく、あるいは、人間らしく生きることの本質なのである。このことの価値に気づけば、「遊びを真剣に（真面目に）遊ぶ」という時空間を確保することが「人間として善く生きる」という暮らしの中で最も重要なものとなる。親自身がそうした気高い遊びを中心価値においたライフスタイルを優先させることができれば、子どもにも「美と神聖な遊び」へと連なる遊びの価値への誘いをすることができるであろう。そこに、娯楽や息抜きの意味とは違った、「文化の基礎としての遊び」を大切にしたい親子の豊かな暮らしの創造への道が開けてくるのである。

そのためには、親自身が「休養とレクリエーションのための遊び」で日々終えるのではなく、「美と神聖の高みに遊ぶ」人間精神の営みの奥深さに触れていくライフスタイルを生涯にわたり持つことが何よりも大切であろう。親が「美と神聖な遊び」の楽しさを自ら味わいながら、いわば暮らしの学芸員となって、文化・芸術の魅力に子どもを誘い、ともに楽しみ、深めていくような暮らし方こそが、「文化の基礎としての遊び」を中心

価値におき、遊び精神に彩られた親と子の生活文化を形作っていくことになるのではないだろうか。

そして、ホイジンガの考察に従えば、スポーツの持つ文化性は、その可能性を孕んでいることに、もう一度心を留めておきたい。

## 5. 子育て支援活動の基本理念に関する考察

以上、心身健康な子どもを育む子育て支援活動のあり方を描くことを目的とし、運動機能の発育発達理論とプレイ理論の両面から、子どもと遊び・スポーツのあるべき姿、それに関わる親子の暮らしのありようについて論考をすすめてきた。

これまでの考察を踏まえ、最後に、人間のすべての精神活動の基盤を創る子どもの心身の健康を願って、そして、その受け皿となる親と子の生活文化の熟成のために、どのような視点からの子育て支援の社会活動が望まれるのか、その基本的な考え方について、まとめておきたい。

第一に、子どもへの「楽しいスポーツ」「遊びとしてのスポーツ」の提供において、「運動有能感」を感じられるような遊びやスポーツの機会提供が望まれるという点である。

有能感とは、「認知された有能さ（perceived competence）」のことであり、自分が自分を取り巻く環境へ働きかけをした結果、「できる」という気持ちを自分自身で感じられるということ（さす<sup>44)</sup>）。有能感は、周囲からほめられるかどうかが基準ではなく、自分自身が「私にもやれる」という実感を持つかが鍵となる<sup>45)</sup>。運動有能感とは、子どもたちが運動をしたり遊んだりする場面で、「これをやってみたい」と感じ、やってみた結果「できた・うまくなった・認められた」という達成感、成功感を、自分自身が実感として感じ取り、「またやってみたい」「さらに違うことをやってみたい」という内発的動機の気持ちへとつながるものである<sup>46)</sup>。反対に、「自分はだめだ」という思いが重なると、運動無能感となる。運動有能感とは、肯定的な自己概念をもたらし、自らすすんで主体的にいろいろなことに取り組む気持ちを育み、間接的に子どものパーソナリティの形成に影響する<sup>47)</sup>。従って、子どもが運動有能感をもてるような経験をサポートすることは非常に大事な

ことになる。

運動有能感を育むということは、学校体育の現場でも日々取り組まれている研究課題であるが、特に、運動有能感は、幼児期・児童前期の多彩な運動遊びの中で自然に育まれることが望ましく、幼児から児童期全体を見渡しての遊びや楽しい運動経験をどのように継続的に体系的に子どもたちに機会提供していくか、学校体育と協力して社会活動の場でも考えていくことが、これまで以上に必要とされるのではないだろうか。

第二に、親に対する働きかけの必要である。情報洪水の中、子育てに関してもたくさんの情報が溢れているが、「子どもの身体の発育発達と遊び・スポーツ」に関する情報は、あまり流布していないように思われる。また、一般に、親は子どもの「運動好奇心」の開発にはあまり関心をよせない<sup>48)</sup>。しかし、本稿において述べてきたように、子どもの運動能力の発達こそ情緒面・社会性・パーソナリティすべての側面における発達の基本であり、必要な運動能力の発達がすすまなければ、非常にバランスを欠いた発育となってしまうのである。この点について、本質的な正しい知識を保護者に持ってもらい、そこから子どもの暮らしを見直してもらうようなカウンセリング・プログラムの開発や、シンポジウムの場合などで基本的な考え方を積極的に発信していくことが何よりも必要ではないか。先に述べたように、親の子どもの遊びへの関わり方次第で、子どもの遊びは変わる。そして、親の意識改革がなければ、子どもとのライフスタイルのあり方も変わらない。特に、自然な遊びが崩れた現代においては、親がどのような意識を持って子どもの遊びを保証するかがとても大切になるのである。

第三に、ホイジンガに従って論考してきた「文化としてのスポーツ」という見方から発想したスポーツの魅力に動機づけていくという観点である。そのためには、スポーツを種目ごとの世界に閉じこめるのではなく、スポーツを通して美しく高貴なる人間の精神に向かう価値に誘うことを目的とした親子のためのスポーツ・プログラムの開発が必要である。一般に、スポーツは勝ち負けの結果だけで見られてしまうことが多いが、スポーツを、美と卓越性を求める人間の文化表現の一つ

として眺める機会に出会えば、スポーツへの見方が変わるであろう。そして、「肢体の力と気力の芸術」としてスポーツを見る目が育まれれば、健康・体力づくりのためのスポーツから美への架け橋としてのスポーツとなり、映画や音楽や絵画や文芸の時間を暮らしの中に取り入れるのと同じように、観戦を含めたスポーツ活動が暮らしの豊かさ、心の成長と結びついたかたちで大切なものになるだろう。

このようなスポーツの価値への誘いは、一流のプレイ、一流のプレイヤーに直接触れる機会こそ最大の動機づけとなるのではないか。ただ一流選手をアイドルのように呼んでくればそれでよいということではない。「本物の価値」へどれだけ心深く橋渡しするかが問われる。一流選手の身体美・精神美を言語化し、そこに人間精神の高みを発見していくような機会は、子どもにとっても、また大人にとっても大切である。こうした場を設けることができるのも、子育て支援の社会活動の場ならではのものではないだろうか。仮に、そこで行われたプログラムを映像化して公開することができれば、それは限られた親子を対象とした一過性の企画で終わることなく、誰もが視聴でき、スポーツの本質的価値への見方が拡がっていく。そのような質の高いスポーツ・プログラムが開発されるべきである。

## 6. まとめ

我々誰もが、子どもたちに、心身ともに健康で幸せな暮らしを手渡していきたいと願っている。本稿を通じて概観してきたように、その原点に「遊びに満ちた暮らしを作る」「遊びとしてのスポーツを楽しむ」という営みを置くことはとても大切で、その中から、親と子の暮らしが育む豊かな生活文化の可能性も拡がる。遊び・スポーツを通じて生まれる豊かな親子の暮らしの創造をいかにサポートしていくか。そのために、子どもの身体と遊び・スポーツの本質的価値に、どのように気づき・動機づけを与えていくか。子どもの遊び・スポーツの支援に関わる社会活動の場が本腰を入れてなすべき仕事は、数多くあると結論づけることができよう。

## 註

- 1) 内閣府「国民生活に関する世論調査」には、「今後の生活において、物の豊かさを重視するか、心の豊かさを重視するか」についての時系列統計がある。それによると、1975～80年頃を境にして、「物の豊かさよりも心の豊かさを大事にする暮らしを求める」という意識がはっきりとあらわれはじめ、以降、「心の豊かさ」は「物の豊かさ」を重視する意識よりも上回り続けている<sup>1)</sup>。
- 2) 日本経団連では、1991年から会員企業とワンパーセント1%クラブ法人会員（経常利益や可処分所得の1%相当額以上を自主的に社会貢献活動に支出しようと努める企業や個人を募り、その社会貢献活動を円滑に推進することを目的に1990年に設立）を対象に、「社会貢献活動実績調査」を行っている。最新の『2004年度調査報告書』（2006年2月）によると、回答した454社（調査時期2005年8月～10月）のうち、社会貢献活動に取り組んでいる企業は430社にのぼり、社会貢献活動支出額は総額1,508億円（前年度比22.2%増）、一社平均3億5,100万円（同5.1%増）で着実な伸びを見せているとのことである。
- 3) 2)の報告書によると、分野別の社会貢献活動支出をみると、「文化・芸術」「学術・研究」「教育・社会教育」「環境」「地域活動の推進」「スポーツ」等が上位に挙がっている。
- 4) 非営利法人。1994年に内閣府国民生活審議会の報告書において、非営利法人制度の創設が提唱され、1996年には、日本のNPO全体の発展を願い日本NPOセンターが設立される。以降、新しい市民社会づくりを目指して、NPO法人数は確実な伸びを見せている。
- 5) 日本NPOセンターの分析によると、2004年6月現在の認証NPO法人総数は17,421法人であり、主な活動分野法人数で見ると、「保健・医療・福祉」が全体の4割を占めるが、次いで「環境保全」「学術・文化・芸術・スポーツ」「子どもの健全育成」「まちづくり」がそれぞれ全体の約1割で、上位6位で全法人数の約8割を占めている。
- 6) 「週5日制による土曜日の活用は、学校・家

庭・地域社会が相互連携し子どもの居場所づくりなどの事業展開をしている。これにより、生活・社会・自然体験などが経験でき、たくましさや豊かな人間性を育むことができる」（全国都市教育長協議会）。出典：文部科学省中央教育審議会義務教育特別部会（第33回・第34回）議事録・配布資料〔資料1〕-8：義務教育特別部会における関係団体の意見（抄）、2005

- 7) 門脇によれば、ここ数年、「子ども」や「青少年」に関する研究を目的とした学会の新設が目立っているという。1993年の「日本子ども社会学会」の設立に始まり、2000年には「日本赤ちゃん学会」と「日本青少年育成学会」が、2003年には「日本子ども学会」が設立された。2005年には子どもの成育に寄与する環境づくりを目指す「こども環境学会」の活動が本格化している。また、市民の手による子どもの育ちを支える地域社会の創造を目指して、特定非営利活動法人「日本子どもNPOセンター」が2002年に活動を始め、同年、子どもたちがメディアの洪水に流されることなく、主体的に向き合う力を育み、子どもとメディアの“新しい関係”を創り出すことをめざして、特定非営利活動法人「子どもとメディア」が立ち上がり活動している。また、NHKは子どもの成長にテレビが与える影響を10年間にわたって継続的に調べる調査研究を開始した。門脇は「私が何らかのかかわりをもつ学会や法人だけでもこれだけすぐに挙がるほどであることを考えると、全国各地でこういう動きが相当多くあるものと推測される」と述べている。（門脇厚司、親と子の社会力、朝日新聞社：pp.220-221,2003）
- 8) 西洋の思想には、人間的存在の特徴を天使的存在と比較して考えると考え方がある。それによると、人間も天使も同じ神の被造物で、精神的な活動を行うものとして創造されたが、天使の精神的営みは、「身体」を通す必要がない。それに対して、人間の精神活動は「身体」をもって行われると考えられるのである。（稲垣良典、天使論序説、講談社：pp.31-42,1998）

- 9) 「人間の暮らしに必要な動き」とは、「日常生活での動作」「作業や労働としての運動」「表現の技能や芸術的活動としての運動」「スポーツやレクリエーションとしての運動」を指す。(宮丸凱史, 幼児期と動きの獲得, 体育の科学, vol. 35, No. 1: p. 16, 1985)
- 10) 長年, 子どもの遊び環境づくりを研究している仙田によると, 子どもの室内遊び時間が外遊び時間を上回り始めたのは, 1965年頃を境にしてのことであるという。その後, 1983年にテレビゲームが発売され, 一気に子どもの遊び集団は解体し, 子どもの遊びは個人で成り立つものとなった。(仙田満, 子どものすこやかな発達と都市のあそび場, ニッセイ基礎研究所編「少子社会への11人の提言」ぎょうせい: pp. 173-192, 2000)
- 11) 内閣府「第2回青少年の生活と意識に関する基本調査」によると, 小学4~6年生の休日の過ごし方の第一位はテレビ視聴(67.6%), 第二位はテレビゲームなどの室内ゲーム(56.8%)となっている。(日本の青少年の生活と意識[第2回調査] 青少年の生活と意識に関する基本調査報告書, 内閣府政策統括官・総合企画調整担当篇, 2001)
- 12) マイネルは, 知的発達, 性格の発達, 美意識の発達や社会性の発達などに関する研究に比べ, 運動系の発達に関する研究が著しく立ち後れてきたことを指摘し, 運動発達が人間の全人的な発達にいかほど大切なものであるかを理論づけている。(マイネル, K, 金子明友訳, マイネル スポーツ運動学, 大修館書店: pp. 274-360, 1981)
- 13) 菊によれば, 「体育嫌い」の反省を踏まえて「楽しい体育」を目標に掲げる学校体育が推進されたが, 20年以上を経てもなお「遊び」の根源的重要性を確認し, 認識するまでに受容されていないのではないかという。学習のねらいやめあてに「楽しさ」を挙げるものの, 「体力」「技能」「態度」といった項目の向上が平行して掲げられ, 肝心の子どもからみた「遊ぶ楽しさ=面白さ」の特性のとらえ方が授業論の中で十分に理解されていないと指摘している。そして, スポーツを遊びとして捉える原点を問う作業の大切さを指摘し, そのための題材としてヨハン・ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』を挙げている。(菊幸一, ホイジンガを読み直す, 子どもと発育発達 vol.3, No.3: 140-144, 2005)
- 14) 杉浦は, 歴史家・文化史家であるホイジンガの全著作, 並びにホイジンガの思想の歴史的・社会的背景も踏まえてホイジンガの遊び文化論を研究し, 遊びと文化の関係を捉え, 現代社会における遊びの意義を論じている。本稿におけるホイジンガ解釈は, この研究から多くの示唆を得ている。(杉浦恭, 「ホモ・ルーデンス」の歴史的背景に関する一考察, 平成元年度筑波大学大学院体育研究科修士論文/杉浦恭, 新しい時代におけるあそびと文化の方向性—ヨハン・ホイジンガをてがかりとして—, レジャー・レクリエーション研究 47:13-20, 2002)
- 15) 「子どもの遊びとからだ・こころ研究会」は, 富士ゼロックス・小林節太郎基金の助成により行われた研究会で, 現代の子どもの遊びとからだ・こころの関係について, 例会の研究会と総会のシンポジウムとを行い, 心身の発達の基礎を培う幼児期の教育における遊びの重要性について, 体育学, 運動学, 心理学, 教育学, 文化人類学, 医学等の識者が議論を重ねたものである。総会にあたるシンポジウムは, 1987~1991年の各年, 計5回開催され, それぞれの討議内容は全5巻の報告書にまとめられている。
- 16) ミヒャエル・エンデの童話『モモ』では, 大人の暮らしから時間を奪う時間泥棒が, 子どもの時間はなかなか奪えなかったが, それは, 子どもは「今を生きている」という存在であり, 子どもの中には時間がただ通り過ぎていくだけで貯まらない, 従って盗むべきものがそこにはないから, 時間泥棒も入れないというレトリックであった。(ミヒャエル・エンデ, 大島かおり訳, モモ, 岩波書店: 360pp, 1976/小高康正, 『モモ』と〈魔法の鏡〉のエピソード, 童話の森通信 vol. 10, 黒姫童話館: p. 17, 1996)

## 参考文献

- 1) 内閣府大臣官房政府広報室, 国民生活に関する世論調査, 平成 17 年 6 月調査
- 2) モーティマー・J・アドラー (下島連, 若林彰訳), アリストテレス フォー エブリボーイ, 日本ブリタニカ: pp. 137-148, 1979
- 3) 宮丸凱史, 幼児期と動きの獲得, 体育の科学, vol. 35 (1): 15-20, 1985
- 4) 加賀勝・平田和子・高橋香代・清野佳紀, 成長期における日常生活活動量の体力・運動能力に及ぼす影響, 日本小児科学会雑誌, vol. 106 (5): 655-664, 2002
- 5) 宮丸凱史, 運動能力の発達バランス, 体育の科学, vol. 48 (9): 699-705, 1998
- 6) 宮丸凱史, 子どもの動きの発達からみた「基本の動き」, 体育科教育 vol. 28 (6): 14-18, 1980
- 7) 近藤充夫, 保育内容健康 [第 2 版], 建帛社: pp. 35-67, 1999
- 8) E. B. ハーロック (小林芳郎, 加賀秀夫, 相田貞夫訳), 児童の発達心理学 (上), 誠信書房: pp. 225-229, 265-274, 1971.
- 9) 杉原隆, 心理的発達からみた幼児の運動指導, 体育の科学 vol. 35 (1): 21-24, 1985
- 10) 中森孜郎, 体育ぎらいの子, 岩波書店: 241pp, 1983
- 11) ヨハン・ホイジンガ (高橋英夫訳), ホモ・ルーデンス, 中央公論新社: 477pp, 1973
- 12) ロジェ・カイヨワ (清水幾太郎, 霧生和夫訳), 遊びと人間, 岩波書店: 292pp, 1970
- 13) ジャック・アンリオ (佐藤信夫訳), 遊び, 白水社: 196pp, 2000
- 14) 里見元一郎, ヨハン・ホイジンガ, 近代文芸社: pp. 148-151, 2001
- 15) ヨハン・ホイジンガ, 前掲書, pp. 16-18
- 16) ヨハン・ホイジンガ, 同上書, p. 19
- 17) ヨハン・ホイジンガ, 同上書, p. 36
- 18) ヨハン・ホイジンガ, 同上書, p. 165
- 19) プラトン, 法律第 7 巻 803C-E
- 20) ヨハン・ホイジンガ, 前掲書, pp. 110-112
- 21) ヨハン・ホイジンガ, 同上書, p. 355
- 22) 畑正高, 香三才, 東京書籍: 272pp, 2004
- 23) 岡野弘彦, 歌合における俊成と迢空, うたげの座第八号, 不識書院: pp. 26-42, 2001
- 24) ヨハン・ホイジンガ (堀越孝一訳), 中世の秋, 中央公論社: p. 74, 1976
- 25) 里見, 前掲書, p. 139
- 26) ホイジンガ, 前掲書, p. 55
- 27) 正木健雄, 遊ぶこと・生きること——子どものからだの育ちの面から, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第 3 回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金): p. 47, 1989
- 28) 服部祥子, 遊ぶこと・生きること——子どものこころの育ちの面から, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第 3 回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金): pp. 49-71, 1989
- 29) 小塩節, 私の幼児教育の現場から, ANGEL 創刊号, エンゼル財団: pp. 59-61, 1992
- 30) 森林, 遊びの原理に立つ教育, 黎明書房: pp. 250-278, 1992
- 31) 森, 同上書, p. 269
- 32) 藤本浩之輔, 子どもの遊び環境, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第 3 回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金): pp. 149-160, 1990
- 33) 仙田満, 遊びの原空間, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第 3 回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金): pp. 123-131, 1990
- 34) 森上史郎, 幼稚園・保育所における生活と遊び, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第 2 回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金): pp. 115-125, 1989
- 35) 河合隼雄, 子どもの「時間」体験, (三木卓編, 「日本の名随筆 91 時」, 作品社): pp. 90-100, 1990
- 36) 佐伯胖, 遊ぶこと・生きること, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第 3 回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金): pp. 5-30, 1990

- 37) 金子明友, スポーツと子ども, (東洋他編, 「児童文化入門」, 岩波書店) : pp. 133-161, 1996
- 38) 松田岩男, 幼児の運動遊びと自己教育力, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第1回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 31-38, 1988
- 39) 大場幸夫, 遊びを育てる保育実践, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第3回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 199-208, 1990
- 40) 佐伯胖, 遊ぶこと・生きること, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第3回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 5-30, 1990
- 41) 嘉戸脩, 子どものスポーツをめぐる神話, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第2回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 153-160, 1989
- 42) ホイジンガ, 前掲書, p. 399
- 43) 近藤充夫, 子どもの発達とスポーツの指導, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第2回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 175-188, 1989
- 44) 桜井茂男, 内発的動機づけ, (宮本美沙子責任編集, 「新・児童心理学講座7」, 金子書房) : pp. 91-133, 1991
- 45) 梶田穀一, 自己有能感を育てる, 教育研究 vol. 56 (8) : 14-17, 2001
- 46) 木下光正, 運動への有能感を高める授業づくり, 教育研究 vol. 56 (8) : 30-33, 2001
- 47) 宮丸凱史, 幼児の遊びと動作の発達, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第1回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 111-138, 1988
- 48) 松田岩男, 幼児の運動遊びと自己教育力, (子どもの遊びとからだ・こころ研究会編, 「第1回シンポジウム子どもの遊びとからだ・こころ」, 富士ゼロックス小林節太郎基金) : pp. 31-38, 1988

( 受付：2006年5月9日 )  
 ( 受理：2006年7月25日 )